

大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学 小林倫道気付
(Tel) 075-574-4113 (Fax) 075-574-4122

大阪市立大学・学術情報総合センター見学記

3月15日(出)
見学会

大館 和郎

地下鉄「あびこ駅」から15分ほど歩くと、周囲を威圧するような高い建物が見えてきました（後ほどあった説明では、半導体チップをイメージしたそうです）。直観的にめざす建物だとわかりましたが、その際の第一印象が良い意味でも悪い意味でも裏切られず、建物の内部を見学するにつれ強まっていきました。

ここ2年ほどの間に大阪では、大型図書館（大阪府立図書館、大阪市立図書館）があいついで建設されていますが、これほど規模の大きな図書館とは思わなかったので、最初は圧倒されていました。地下4階・地上10階、延面積37,000㎡の規模では、初めて訪れた者は思わず見上げてしまうのではないのでしょうか。カメラのファインダーに建物全体がおさまりきれないのです。

1階のエントランスホールにはいると中央の階段上部に地下1階から7階までとどく巨大な吹き抜け空間が現われます。エレベータで5階のAVホールにはいって、職員の方から建物の概略の説明を受け、図書館紹介ビデオを見た後、各階を案内してもらいました。

説明によれば、建設費は、326億（内訳は建物本体が約300億、家具・備品が約30億）、維持費10億（内訳は光熱費1億7,000万、電気1億5,000万、情報機器関連3億5,000万、委託費1億3,400万、データ入力・図書購入費2億2,000万（そのうち図書館資料費1億））とのことです。つまり実質的な資料費は維持費の内の10分の1ということになります。

財政赤字の大阪市の下でこれだけの建物ができたのは計画がバブルの時代に立てられたからで、今では実現は難しいだろうとの説明がありました。各階はそれぞれ機能によってゾーニングされており、以下のようになっています。

- 1F：文化交流ゾーン
- 2F：レファレンスゾーン

目次

大阪市立大学見学記（大館和郎）	1頁
書評「インターネットはからっぽの洞窟」 （篠原俊夫）	3頁
支部委員会報告	6頁
大図研京都数珠つなぎ⑤	5頁

支部報に関するご意見は最寄の支部委員または編集気付（京都橘女子大学 ☎075-574-4113 (FAX 075-574-4122) ♥ PXX01651@niftyserve.or.jp またはNIFTY-Serve:PXX01651小林）まで

- | | |
|----------------|----------------|
| 3～4F：図書閲覧ゾーン | B1F：雑誌センターゾーン |
| 5F：マルチメディアゾーン | B2～3F：デポジットゾーン |
| 6F：事務管理ゾーン | |
| 7F：研究・閲覧ゾーン | |
| 8F：特殊資料ゾーン | |
| 9F：情報処理センターゾーン | |
| 10F：研究・交流ゾーン | |

探している資料によっては配架場所が分散しているので、注意が必要です。たとえばある雑誌のバックナンバーを調べるにしても発行年により配架場所が違います。和図書の配架場所も適用されているNDCの版によって違うので、何の手がかりもなく、事前調査もなしに、必要な資料を探し出すのは、難しいと思います。1階のインフォメーションカウンターや、2階のレファレンスカウンターで質問するのが、いちばんてっとり早いのですが、各階ごとの施設案内や資料の種類別のパンフレットがけっこうそろっていて、ガイド代わりになります。敷地の関係で10階になったのかも知れませんが、低層階で各フロアが横に広がっている方が利用しやすいのではないかと思います。

貴重コレクションは7階の文庫書庫に旧大阪商科大学当時に購入した福田、ゾンバルトロゼンベルクの3文庫や、新制大学になって購入した森、新村、内藤の3文庫を収蔵しています。8階には貴重書庫があり、マルクス『資本論』初版本など国内でここしかない資料を保管しているそうです。ざっと見てまわっただけで資料の価値がどれだけのものか見当もつきませんが、スペース的にはかなり余裕がありました。

各フロアのスペースに関しては十分な広さを確保しており、地下書庫の書架と書架の間のスペースも、十分余裕がありますので、職員にとっても十分余裕があります。施設内で資料の運搬を行なう搬送システムは2種類あります。1つは図書自動搬送用AGV (Automatic Guided Vehicle) と呼ばれるもので、4輪駆動の車両が図書をのせたブックトラックを背負って無線通信で動くらしいのですが、残念ながら見学当日は動いているところは見ることができませんでした。図書館界では初めて導入されたものらしいのですが、見た目には遊園地のこども用の乗り物のようです。もう1つは、自走式台車搬送システムと呼ばれるもので施設内の各部署に設けられたステーション間をレールで結び台車と一体となった箱に資料を入れて運搬を行ないます。さながら工場の中にいるような錯覚におちいります。

このセンターは一般市民にも開放されていますが、20歳以上（他大学学生及び大学受験生を除く）で大阪市内に在住もしくは勤務している者という条件がついています。

半日たらずの見学でこれほど大きな図書館の全容をつかめるとは思っていませんが、思いつくまま感じたことをとりあえず書いてみました。

(おおだて・かずお／京都学園大学図書館)

書評

「インターネットはからっぽの洞窟」

クリフォード・ストール著

倉骨彰 訳 (草思社)

篠原 俊夫

1994年頃からインターネット関連の書籍の出版が相次いだから、なんでもいいからタイトルにインターネットのキーワードが入った書籍を探せということになれば、相当な数にのぼるだろう。私がとりあえず購入して積んでおいた書籍を数えただけで10冊ほどあったから、網羅的に收拾している人なら、それこそ書棚に一棚分以上たまっているかも知れない。それだけの数の書籍が出版されているのに、読み終えて何らかの新しい視野のひろがりを実感することはまれである。いつか読んだ技術面の解説に終始した入門書の延長にすぎないと感じられることが多い。インターネットの世界に分け入り、その毒を存分に受けながら、捉われることなく自由な批判的視点を失わない、もし理想的なインターネットの水先案内人というべき人があるとすれば、その条件を満たさなければならない。この本の著者クリフォード・ストールこそ、その求める人だと思う。

この本を誰もがそうするように、第一章から順を追って読んででも良いのだが、図書館員なら、目次を見たとき、どうしても第11章の「消えゆく図書館」が気になってしまう。

読みはじめるとどんどん引き込まれて、一気にその章を読み終えてしまった。因みにこの章は以下のように締め括られている。

「僕は図書館情報化推進者という獅子身中の虫によって、僕らの図書館が内部から食い荒らされてしまうことを危惧している。僕が恐れるのは、彼らが書籍購入予算を食い荒らし、利用者よりコンピューターとの対応を好むような図書館員を増やし、図書館が希薄な内容の情報をただ迅速に提供するような場所になりさがってしまうのではないかということだ。もしそうなってしまったら、僕らの図書館からなくなるのは蔵書ではなくて、図書館自体の存在価値だ。僕にはそう思えてならない。」

常識的には、こんな頑迷な？言葉を吐くのは、守旧派の図書館員か機械文明からとり残された哀れな老人かと思いきわむ人のほうが多いだろう。しかし、予測は見事に外れる。

この本の著者、クリフォード・ストールは1950年、ニューヨーク州バッファロー生まれで、ローレンス・パークレー研究所にいたときには、ハッカーの大追跡をおこない一躍有名になったという経歴をもつ。普段は木星の研究や宇宙望遠鏡の設計に携わる天文学者である。腕自慢のハッカーを追い詰めるくらいだから、著者にとってコンピューターの世界には誰よりも親しんでいるはずだ。

「はじめに」の章のなかに彼のインターネット・ライフとも言うべきものが要約されている。15年も前からネットワークユーザーだった著者はインターネットがもっとも関心のある、魅力的なコミュニティであることは認めたくえで、こうも言わざるを得ないのだ。

「今夜のうちに、僕は20通のメールに返信しなければならない。チャットの誘いも三つある。ニュースグループも10は目を通さなければならない。ファイルだっていくつかダウンロードしなければならない。どうすりゃ全部できるっていうんだ？」

早々に結論を言ってしまえばこうなる。

「コンピューターネットワークは、僕ら個人個人を孤立させ、僕らに実体験をみくびら

せ、僕らの読み書き能力を低下させ、僕らの学校や図書館を危うくする」と。

ここでもう一度「消えゆく図書館」にたち帰って、もう少し丁寧に著者の主張に耳を傾けて見よう。

例えば、世界的な名作である「白鯨」、「失楽園」、それに聖書やブッシュ大統領の演説集などを次々にデジタル化してネットワーク経由で利用させるというグーテンベルク・プロジェクトの素晴らしさは認めるが、その計画の進行速度はまことに微々たるもので、米国議会図書館の全蔵書量からみたら、とるに足りない冊数にしか相当しない。月に10冊のペースでデジタル化しても、年間あらたに4万冊の本が増加する。所詮は焼け石に水である。デジタル化すべき図書の選択基準もわからない。

「ネットワーク化社会になれば、膨大な量の情報に素早くアクセスすることが可能になるといった花火を打ち上げながら、インターネット推進者はブックレス図書館について語り、実質的にすべての書物がネットワーク経由でアクセスできる日がやがてやってくると予言する。(中略)だが、僕に言わせれば、ブックレス図書館は夢物語にすぎない。それもネットワーク中毒者の、ネットワーク狂信者の、そして図書館情報システム推進者の夢物語だ。」

「それから電子図書館システムについては、欲得ずくで情報化を推進し、羊頭狗肉の商売をしている連中がいるから気をつけなければいけない。現に、彼らは米国議会図書館と3,500万枚のレコードのオンライン化を約束していながら、実際にやったのは、図書目録を電子したことと、スターリンの演説の翻訳やレナード・バーンスタインの書簡などを含む何十かのコレクションをネットワークアクセスできるようにしただけだ。書籍でオンライン化されたものは実質的に一冊とない。『仮想電子図書館』だそうだが、まさに『仮想』もいいところだ。」

これでは、図書館の現場で明日の電子図書館の可能性を夢見てとは言わないまでも、ともかく実験的、試行的に少しでもそれらしきものの実現に努めている者にして見れば、頭から冷水を浴びせられたような気持ちになるだろう。

図書館員なら誰でも知っていることだが、電子図書館の未来を容易ならぬものにしていくのは、技術や経費にかかわる問題もあるけれども、何より著作権の問題をどうクリアすべきかという問いにたいして今だに有効な解答を見いだせないことにある。

電子出版権の入手は可能だが容易ではない。出版社、著者、税務当局の取り分を考慮すれば認可料は相当高額なものになるだろう。それは当面、エンターテインメント以外の学術分野では受け入れ可能だろうが、受益者負担でしか利用できないことになれば、歴史学専攻の大学院生が利用するには、費用がかかりすぎるということになる。

図書館資料のデジタル化に経費がかかることはしかたがないとしても、デジタル化した資料を長期間保存しておけないという問題がある。すなわち、CD-ROMを例に考えてもいいが、CD-ROMそのものの記録媒体としての耐久性よりも、読みだし装置のほうが問題だということである。著者自身が関係した事例として、1979年にNASAのバイオニア宇宙船が土星に接近したとき、送信データを磁気テープにとる手伝いをしたのだが、貴重なデータを確実に保存するために、同じものを9トラックの磁気テープ、7トラックの磁気テープ、紙テープ、パンチカードの4種類の記録媒体に保存したという。その時のテープ類やパンチカードは、イグアナとサソリ(何故かは知らないが)に守られながら、いま

でもツーソン市の倉庫に眠っている。しかし、肝腎のデータを読み出すことは、読みだし装置がすでに過去のものとなって身近なところにはないので利用することはできない。

「そこで僕はそこで思わず自問してしまう。僕がいま使っているワープロソフトやデータベースソフトで作ったファイルは、いまから五十年後でもちゃんと読めるだろうか？ハイパーテキストを作成するためのプログラミング言語もそうだ。いまでこそWWWやモザイク、ネットスケープなどといったインターネット関連のプログラム作成に盛んに使われているが、五十年後にも意味をなすのだろうか？」

ところで、この本を読んで驚かされたことは本当は電子図書館の将来などではなく、伝統的な図書館と図書館員への著者の過剰とも思える思い入れである。

『ネットワーク、開かれたアクセス、仮想図書館』の著者、クリフォード・リンチの描く図書館システムには、ワークステーションはたくさんあり、知識や情報もあふれているが、本は一冊もない。それに比して、この本の著者が考える理想の図書館は少しも新しくない。

「しかし僕の描く未来の図書館には、本がたくさんある。カード目録も児童図書館もあるし、子供向けのお話し会もある。閲覧室にはその日の朝刊がそろっていて、雑誌もたくさん置いてある。読み古しのペーパーバックが箱入りで置いてあったりもする。(一冊25セントで売っている)。コルクボード製掲示板には、地域のお知らせがいっぱい貼ってある。安くコピーができる複写機が置いてあって、つっけんどんだけ顔は笑っている司書がいる。そして書架では二、三人のボランティアが返却本を戻してくれている。そう、お察しのとおり、僕の理想の図書館とは、僕の住んでいる町にいまある図書館だ。」

「学術研究で重要なのは、掘出物を見つける才能だが、それのある人は書架をチェックしながら、自分の探し物に関連した資料を見つけられる。また、そうやって見つけた資料の文献を一覧に別の関連書籍が記載されていることもあるが、それは偶然の産物でもなんでもない。図書館は、こういう発見のよろこびを楽しむように作られているのだから。

といったようなことを書くと、図書の収納整理技術と検索方法をいっしょくたにしていると思われるかも知れないが、そうではない。図書館を使いやすく便利な場所になっているのは、書架を発明した人ではなく、デューイ図書分類法を発明したデューイと、図書目録方法を改良してきた歴代の図書館司書の人びとだ。」

著者が賛美しているのは、本当は過ぎ行く図書館と図書館員だと今は言うべきなのかも知れない。クリフォード・ストールはインターネットに代表されるコンピューターの世界と伝統的な図書館の最良の理解者であるがゆえに、根拠のない楽観論に依拠した電子図書館万能論に警鐘を鳴らさずにはいられなかったのではないのだろうか。

わざわざおことわりするまでもなく、小生がここに書いたことは著者の文章として、もっと的確に表現されている。そのすべてを引用という形式で紹介するには限界があるから勝手な要約的介绍をした。結論だけを言えば、多くの図書館員に読んで戴き、今となっては避けて通ることのできない電子図書館を図書館員としてどう取り組むべきかを考えるきっかけとなればということである。なぜなら、私自身が安くない費用を投じてパソコンを購入し、プロバイダと契約し、テレホーダイで夜な夜な目を赤くして、あまり意味のないWEB ページをのぞいている一人の図書館員でもあるからである。

(しのはら・としお／京都大学総合人間学部図書館)

支部委員会だより

第8回／於・同志社大学クローバーハウス／3月4日(火)午後7:00～

【主な議題】

- ① 支部報編集内容について（4月号、5月号、6月号）
原稿依頼状況の確認、掲載内容の調整。
- ② 「職員問題」ミニ研究集会の開催について
6～7月開催に向け、近畿各支部と意見交換会を行う方向。
- ③ 大阪市立大学学術情報センター見学会
参加者の確認、支部報報告記事執筆の依頼について。
- ④ 近畿5支部合同新春例会報告
参加：篠原、竹本、大館、井上、堤、中島、小林、田北

----- (☐最終ページより「数珠つなぎ」のつづき) -----

「相互協力便覧」

私立大学図書館協会京都地区協議会が提起された「相互協力3協定」の動き（参照：中村恵著：「私立大学図書館協会京都地区における相互協力3協定成立の経過」、『大学図書館研究46（1995）所収』）に触発され、私立短期大学図書館協議会近畿地区協議会でも1994年度より「相互協力委員会」が発足しました。この委員会では、まず各加盟館に相互協力に関するアンケート調査を実施し、加盟館の関心が奈辺にあるのかを調査しました。そして、その結果を基にして1995年より「相互協力便覧」の作成に取り掛かり、年度末の総会において成案を得ることができました。

この「相互協力便覧」では、相互貸借実施要綱および文献複写申し込みの流れ図を新たに定め、またこの実施要綱の基で、各図書館がどのような条件で相互協力に応じていくのかが加除式バインダーでまとめられています。

3) これからの相互協力の問題点あれこれ－依頼館からのひとりごと－

このように短期大学図書館相互間での相互協力前進についての足固めは整いつつありますが、積み残された課題はまだまだ数多くあります。

①「近隣同種類の図書館からまず検索する・・・」これが図書館相互協力の第一歩であることは、重々承知しているところです。

雑誌目録の活用により、短大図書館がどのような雑誌を所蔵しているかについては容易に知ることができるようになりましたが、図書の場合は依然として有効な検索の手段がありません。

「便覧」では、個別図書についてはFAXを用いて所蔵調査をおこなう（「下手な鉄砲も数撃ちゃあたる！」）ように定めていますが、NACSIS-IR等により（学情と接続している

) 他大学図書館の所蔵が容易に検索できるようになっている昨今、どれだけの加盟館が「まず、近畿地方の短大図書館から探そう!」と思ってFAXに向かうかどうか気がなるところです。(すべての図書館が学情とつないだら問題は解決するのですが、短大図書館の現状を考えると一朝一夕にはムリな話です。)

②また、料金決済をおこなう場合、受付館により決済方法がまちまちなのも相互協力にとって非常に大きな問題となっています。一種のクリアランス・センターのような機関でもあれば理想的ですが、現在の状況からみて望むべくもありません。

実際問題として、文献複写代金を支払うためにいちいち現金書留で送付したり、銀行振込で入金するなどといったことはできる限り避けたいと思うのが人情です(郵送料や手数料の方が高いことがしばしばです)ので、せめて郵便振替を利用する(手数料が安い)ことでの一本化ができないかな、と個人的に思っています。(切手で納入すること一番簡便ですが、受付館の会計手続き上支障があることが多いようです。)

また、本学図書館では国立大学図書館に依頼する場合は、できる限り事前に「徴収猶予制度」を活用して、「国庫金納入告知書」で支払うようにしていますが、これも大きな負担であることには変わりはありません。年度毎に更新の手続きをおこなわなければなりませんし、個別図書館に対して申請を出さなければならないことも煩雑です。1回申請すれば更新も可能で、全国の国立大学図書館に対して一つの許可番号で有効とならないかな、と思っているところです。

③前項後段の部分とも関係してくるのですが、国立大学等が発行している紀要類を文献複写申し込みする際、どこに申し込みすればよいのか判断に迷っています。

従来、紀要等の場合は「発行大学の図書館に対して複写申し込みをするのが相互協力の原則」だと思いき、利用者から紀要類の複写依頼を受けた場合、発行大学に対して申し込みをしていましたが、国立大学の場合は文献複写料金は現金納入(前納制)であり、徴収猶予申し込みをしていない大学の場合は、支払の時のことを考えるととても億劫になってしまいます。

でも、NACSIS-IR [F(J) SCAT等] で調査すると、発行大学以外にも多くの図書館が所蔵していることがわかっている場合、発行大学以外の(過去の経験からわかっている支払方法が簡便な)所蔵館に対して文献複写申し込みをしてもよいものかどうか判断に迷っています。

以上、あくまでも大規模図書館(特に四大)に対して依頼することがほとんどの小規模図書館からの「独り言」でした。(本学図書館の'95年度の相互協力統計は依頼372件・受付14件でした。)

次の数珠の「犠牲者」を探そうとして、わたしなりに努力を重ねたのですが、いかんせん、京都支部の人はほとんど面識のない人ばかりなので、原稿をお願いするまでにはいたりませんでした。そこで、編集部的小林さんに無理を言って、今回は編集部のほうで見つけていただくことになりました(その結果、京都橘女子大学図書館の秋山千奈美さんに白羽の矢が立ちました)。結局、最後の最後まで「不良会員」のままで終わってしまいました。

「数珠つなぎ」のルール

- ①内容は硬軟自由。②原稿量も1ページ程度以上で自由。③執筆者には次回執筆者を指名する義務があります。④指名された人はもちろん拒否権なし。



！ 戦慄の新コーナー！！

大図研京都数珠つなぎ 第15回

平安女学院短期大学
図書館

いしもと いりお さ |
石本容夫 さん

1) はじめに

成安造形短期大学の前川さんからの突然のご指名により、何について書こうかと四苦八苦しているあいだに、会計担当の中嶋さんより「本年度の会費がまだ納まっていません」との督促がありました。このような「不良会員」に原稿依頼がきたのは、なぜ・・・？と頭をひねりましたが、とりあえず駄文を弄して、わたしの責を果たしたいと思います。(会費を踏み倒すつもりは毛頭ないのですが、昼休みのわずかのあいだに郵便局まで足をのばすのは少ししんどい距離に職場がある身には、なかなか会費類を払い込みにいくのが少々おっくうなのです。でも、こんな事は理由になりません。素直にごめんなさい。これからは気を付けます。)

2) 短期大学間図書館相互協力と「協議会」

これからの図書館のあり方を考えていく場合、館種を超えた「相互協力」が必要不可欠なことはいうまでもありませんが、われわれ短期大学図書館が結集している組織として『私立短期大学図書館協議会近畿地区協議会』があります。当協議会では、今までに「雑誌目録」の編纂、「相互協力便覧」の作成などの事業をおこなってきました。わたしはいままでそのいずれにも委員として関わってきましたので、この与えられた機会をとらえてわたしのつたない経験をもとに、今後の「相互協力」に対する展望を語ってみたいと思います。

「雑誌目録」

分担保存・分担収集の手がかり、足がかりにしようとの目的意識をもって初版の「雑誌目録」が上梓されたのが1980年、実に今から17年前のことです。2度にわたる改訂作業を経て、1994年には「1992年版」をさんざんの苦勞の末、ようやく発行することができました。

『学術雑誌総合目録(学総目)』やNACSIS-IRなどのすぐれたツール(全国書誌)があるなか、この目録の出版は、屋上屋を重ねる、との批判も一部には聞きましたが、やはり短期大学図書館相互の協力をはかるツールとして、この目録は全般的に広く受け入れられているのではないのでしょうか。この「目録」はまだ残部もあるようですので、入手ご希望のある方はぜひお問い合わせください。(問い合わせ先:大阪信愛女学院短期大学図書館 ☎06-939-4391)

(☎6 ページへ続く)